

第 119 回 社会情報学部研究会報告 (2010 年 12 月 2 日)

社会情報学部における TA と SA の役割

— TA と SA の当事者の立場から —

The Role of TAs and SAs in the Faculty of Socio-Informatics:
Reports by the Assistants Concerned

中田 徹・長尾 学・梅田 啓祐
原 正樹・高橋 泰明・柚洞 一央

概要：

札幌学院大学社会情報学部は、主に実習系の授業において、TA (Teaching Assistant：演習実習教育指導員，他大学の大学院生が中心) と SA (Student Assistant：実習教育補助員，本学の当該科目の先輩学部生が中心) を有効に活用してきた。今回の研究会では、4 人の SA と 2 人の TA による報告会を開催する。教育をサポートする立場からの意見を交換することにより、各授業での TA/SA の活用方法を共有し、また今後の活用・運営のあり方を考えていきたいというのが今回の研究会の趣旨である。

趣旨説明 高橋 徹
(社会情報学部教務委員長)

SA からの報告

(10 分報告 + 5 分質疑応答)

- ①中田 徹 (社会情報学部 4 年)
- ②長尾 学 (社会情報学部 4 年)
- ③梅田 啓祐 (社会情報学部 4 年)
- ④原 正樹 (社会情報学部研究生)

TA からの報告

(20 分報告 + 10 分質疑応答)

- ①高橋 泰明
(北海道情報大学大学院生・本学部卒業生)
- ②柚洞 一央
(北海道大学文学研究科大学院生)

SA からの報告

社会情報学部における SA 制度の
現状と問題点

— SA 体験者の視点から —

中田 徹

(札幌学院大学社会情報学部 4 年)

1. はじめに

札幌学院大学社会情報学部では、1996 年より学部生からなる Student Assistant (SA) を採用している。SA は PC を使用する講義・演習一体型科目の学習支援を担当している。受講している学生から出た質問、PCトラブルへの対処が主な役割である。本報告では、私自身が 2008 年度「データ解析基礎 I」の SA (Student Assistant) に採用されて以来、3 年

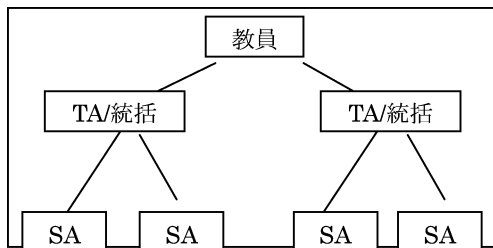


図1 授業におけるSA配置例

間に渡り8科目のSAを経験したことから、SA制度についての現状と問題点を指摘したい。

まずはじめに、授業におけるSA配置例を図1に示す。

講義・演習一体型授業にSAが配置されていることで、教員だけではカバーしきれないことをフォローすることが可能となる。また過去年度に履修し、単位取得をした学生が直接フォローすることで、学生自身が躓いた点を踏まえ指導することができるので、受講学生も理解するまでの時間が短縮されることが考えられる。

その様子が顕著なのが「プログラミング・同演習」である。多くの学生が社会情報学部入学後に初めてプログラム言語に触れることとなる。入学時点であまりPCが得意ではない学生も多い。100名近くが受講するプログラミングの授業では、一人の教員が全員の質問、PCトラブルへの対応、更に課題チェックまですることは難しいだろう。そういった面で、SAは必要であると考えられる。

しかし、学生がSAに依存してしまうことで学生自身の理解が深まらないという問題もある。

2. 各授業におけるSAの役割

ここでは、各授業におけるSAの役割を記す。授業によりSAの形態は様々だが、役割はほぼ同一である。表1に共通する役割と、共通しない役割を記す。

表1 SAの役割

共通する役割	課題チェック 学生からの質問への対応 PCトラブルへの対応
共通しない役割	出席管理 学生評価

このように各授業によってSAの担う役割が違うと言える。共通しない役割の出席管理については、TA (Teaching Assistant) が担っている。

3. 自身の体験と感じた問題点

3.1 自身の体験

私自身は、2008年度の「データ解析基礎I」よりSAを始めたが、その時はすべてが手探りで、うまく指導できたとは言い難い。学年を重ね、様々な授業のSAを体験することで、少しずつではあるがSAの指導方法について学び得ることができた。

3.2 問題点

私の経験を通し、新たにSAを始める学生が毎回手探りで指導法を確立していくのでは、SAのレベルは毎年度上がらないのではないかと考えられる。だからこそ情報の蓄積と伝達がより重要になるのではないだろうか。

また教員側のSAの扱い方法についても一定の指針を設けても良いのではないだろうか。ある科目では、表1にあるように学生の評価までもがSAの業務に含まれる。作品の出来、不出来は本来教員が判断すべきで、SAが判断すべきではないと考える。

4. むすび

SAを通し、様々な体験をすることができた。受講生としてSAが採用されている授業を履修した際にも感じたことだが、先輩学生との繋がりというのは、下の学年ほど心強くと感じる。専門ゼミナールで、どこのゼミに所属するかを選択する際にも、先輩学生の

アドバイスというのは非常に役に立った。そういった意味でも SA の存在意義はあると考えられる。

しかし、学生数の減少で SA の必要性が薄れてきていることも事実であろう。だからこそ、今後はより高い技術を持ち、正確な指導ができる SA が求められていくのではないだろうか。

私の SA 体験

長尾 学

(札幌学院大学社会情報学部 4 年)

1. はじめに

社会情報学部では、複数の演習・実習授業で取り入れられている TA・SA 制がある。学生 30 人につき 1 人の TA (実習教育指導員) または、学生 10 人につき 1 人の SA (実習教育補助員) が配置され、実習指導を行っている。私は 2 年の前期から「情報処理基礎」という講義で初めて SA に応募し、それ以降複数の講義で SA として勤務させてもらった。今回の研究会では自分の経験などを交えて TA・SA 制についての報告を行った。その内容についてここでまとめることにする。

2. 担当した講義

まず自分が SA になろうと思ったきっかけは、自分の学習に対する理解度が深まると考えたからだ。一度履修した講義でも学生に教える立場になることで新しい発見があり、復習ができれば他の講義にも役立つと考えた。さらにアルバイト代がもらえるので一石二鳥だと思った。また、自分が受講していたときに SA の指導がよかったために同じことを後輩にしていきたいと考えた。

今まで担当してきた講義は、2 年生から「情報処理基礎・同演習」、3 年生からは「データ解析基礎 I」、「データ解析基礎 II」、「データ解析 I」、「マルチメディア処理論・同演習」、

4 年生からは「コンピュータアーキテクチャ」も担当した。複数の科目で SA になるとそれぞれの科目で先生が違い、講義のスタイルにも違いがあると感じた。各科目には次のような特徴があった。

①情報処理基礎

授業前後に 10 分程度のミーティングを行う。ミーティングでは注意事項やその日の課題などの説明が先生からある。SA が、授業で多く起こったエラーや問題点などを報告することもある。また、この講義では課題採点プログラムを用いる。学生は作成した課題を課題採点プログラムにかけ、合格の表示が出たら SA はそれをチェックする。

②データ解析

データ解析系の講義では SA のほかに TA もいる。TA は本学や情報関係の他大学の大学院生で SA とは違った役割を持っている。この講義では、出席や遅刻は TA がチェックし、学生を評価する。TA は大学院生なので学習への理解が深い。SA は実際に授業を履修しているのでトラブルに対処しやすく、自分が課題を行って理解できなかったところがわかる。

③マルチメディア処理論同演習

この講義では、SA が出欠・課題のチェックだけではなく、課題の出来や受講態度の評価を行った。「真面目に取り組んでいる」や「SA や友人に頼ることが多い」などといった項目を SA の判断で評価する。

3. 学生のタイプと工夫したこと

複数の科目で SA を勤務したため様々な学生に指導してきた。課題をわりと短時間で終わらせてしまう学生は、自分が終わった後すぐに帰らず友達に教えていることが多い。このような学生が翌年度以降その講義で SA に

なるということもある。

課題に取り組む姿勢も様々だった。ほとんどの学生がSAや友達に質問することもあるが、基本的には自力で課題を進めていた。その逆にSAや友達に教えてもらわないと全く課題を進めることができない学生も一部いた。このような学生は基本的に先生の話聞いていないか、説明を読んでいないということが多かった。そのため、まず教科書などの説明を熟読するように指導し、その上でわからないことがあると言うなら質問に答えた。SAが全ての操作を教えるのではなくヒントのようなものを与えることが良い学習につながると思った。

またSAに質問することをためらっているような学生も多くいた。このような学生には私の方から積極的に声をかけた。理解できないところを把握し、質問しやすい環境を作れると思ったからだ。実際、人見知り気味だった学生でも声かけを行うことによりだんだんよく質問してくるようになった。

その他に自分がSAの際、気を使っていたことは、毎回講義前に予習を行うことだ。予習を行うとどのようなところで躓きやすいかがわかりスムーズに教えることができた。

4. 困ったこと

SA勤務では次のようなことが大変だった。①一人の学生につききりになることがあり、他の学生に呼ばれていても行けなかったこと。②講義実習一体型の授業で実習の時間が足りなくなってほとんどの学生の課題が終わらなかつたこと。③「インターネットに接続できない」などシステムのエラーについて対応ができなかつたこと。

要望としては、SAが予習しやすいシステムを使ってほしいということがあった。学内サイトなどを用いている場合は、学外からも閲覧できれば楽だったかもしれない。また、早めに次回講義についての連絡をしてもらえ

たら予習の時間も取れるだろう。

5. むすび

社会情報学部の複数の講義でSAとして勤務させていただいてとてもためになった。SAとしての活動は自身のスキルアップにつながる。後輩学生に指導するという立場ではあるが自らが得ることも多い。自分が受講生だったときもSAの先輩にはよくお世話になった。SAを志望する学生があまり多くないようにも感じるが、本学部生が学ぶシステムとしてはTA・SA制はとても優れたものだと思うのでこれからも続けていってほしい。

SAをやってきて感じたこと

梅田 啓祐

(札幌学院大学社会情報学部4年)

1. 私が思っていた役割と実際のTAとSA

私は2年次からSAをやらせていただいており、さまざまな講義を受け持った。今回はその経験から感じたことを述べたいと思う。

SAの役割は基本的に現場を担うものであり、TAはSAの力では対応できない問題が起きたときに対応するものだと私は思っていた。また、SAが扱うには難しい情報の管理、講義の進め方などを教員と相談するなどといった役割があると思っていた。

実際、私のSA経験からいうと、TAとSAはあまり業務の内容が変わらず、TAとSAの知識というのはそれほど差がないのではないかと感じた。中にはまったく生徒の質問に対応できないTAもいて、それを不満に思っている人がいる。しかし、教員方がTAを雇っていることにはしっかりとした意味があるはずと思われる。それに、SAが思うように、TAもSAに対して同じような不満があるのではないかと感じた。

原因としては、TAとSAの役割が明確でない(きちんと伝わっていない)というのと、

TA と SA のコミュニケーションが取れていないため、不信感が続いたままになってしまっているのではないだろうか。私の経験からそのように考える。

2. 解決方法

解決方法としては、まず、講義ごとにきちんと SA と TA の役割を明確にし、伝えていけばよいのではないかと私は考える。具体的には、最初に集まりを設け、そこで教員方から説明をすればよい。次に、TA と SA 間だけでなく全体がコミュニケーションをとるように心がける。これはたとえば、プログラミング・同演習では業務中に気づいたことや意見等をオンラインファイルに記述するという仕組みが設けられている。それを他の講義でも行ってほしい。しかし、その仕組みを用意するには手間がかかるので、そういう場合は代わりに意見交換ができる話し合いの場を設けてほしい。

3. これからの SA 制度に対する要望

SA は毎年メンバーが変わってしまう。そのため、どうしても SA 全体のレベルが上がらない。せっかく SA という制度を続けているのに、毎年の積み重ねがないというのは非常にもったいない。そこで、新しく入ってくる SA に知識や経験を伝えていければと思う。そうすることによって、SA が初めての人でもある程度、学生の補助をスムーズに行えるので、より良い学習環境を作っていくのではないかと私は考える。

SA の現状と今後の展望について — 約 4 年間の SA 経験を通しての 提言 —

原 正樹

(札幌学院大学社会情報学部研究生)

1. はじめに

研究会において「SA の現状と今後の展望について — 約 4 年間の SA 経験を通しての提言 —」と題し、発表した内容をまとめたのが本稿である。筆者は大学 2 年次から SA として勤務しており、研究生である今年度も含めると約 4 年間の SA 経験があることになる。そこで本発表では、その経験を生かし、「現状報告」などの報告よりも、「今後どうすれば良いか」といった提言に重きを置いた発表を行うことを目標に据えた。

始めに、「SA に求められる要素」は、コミュニケーション能力、視野の広さ、頭の回転の速さ、アメとムチの使い分け、忍耐力、問題解決能力であると考えられる。これらの要素は、筆者が SA として勤務した中で実感したことである。当たり前なことだと思われるかもしれないが、明確にすることが必要だと考えたので、提示してみた。

2. 担当した科目と SA の業務内容

筆者がこれまで SA を担当したことがある科目は、「プログラミング・同演習」、「データ構造とアルゴリズム論・同演習」、「データベース基礎・同演習」、「コンピュータアーキテクチャ」、「情報通信ネットワーク論・情報ネットワーク演習」、「情報処理基礎・同演習」、「マルチメディア処理論・同演習」、「データ解析基礎 I」、「データ解析基礎 II」、「データ解析 I」である。

筆者が現在担当している SA の中から、「プログラミング・同演習」の業務内容を紹介する(森田, 2009)。当講義の SA には、各グループを担当する「補助員」と、ベテラン SA であ

り3～4グループを統括する「統括補助員」がおり、「教員→統括補助員→補助員」の階層的指導体制を敷いている。筆者は、昨年度と今年度2年間に渡って「統括補助員」の業務を担当している。統括補助員の業務は、補助員では対処しきれないエラーへの対処を行い、各補助員が学生へ指導している最中で身動きが取れないときは、その補助員の代わりに課題のチェックや質問への対応を行うことが中心である。また、講義終了後には新人SAに対して指導上のアドバイスなどを行っている。

SAの業務は、出席・課題のチェックから、コンピュータのエラー対応など多岐に渡る。SAは「Student Assistant」の略であるから、その名の通り学生が学生を補助（サポート）することが本来の役割であると考えられる。だが、SA側としては不本意であるものの、指導の中で「解答そのもの」を教えなければならない場合が増えている。解答そのものを教えるという行為は、「補助」の範囲を超えているといえるのではないだろうか。もしかしたら、受講生の「質」が変化していることにより、SAに求められる役割も変化しているのかもしれない。

ここ数年の間に増えているのは、教科書、テキスト、プリントを読まない（読めない）学生である。そして、そういった学生は、事あるごとにSAに頼り、自分の頭で考えず、答だけを求める傾向が強い。つまり、SAをただの便利屋と勘違いしている節があるのではないだろうか。また、受講態度を注意するとふて腐れる学生も少なからず存在する。

3. TA・SA制度の問題点

過去のTAの中には、勤務態度に問題がある人や、講義内容に関して不服を漏らす人がいた。また、SAの中にも、いい加減な指導（解答をそのまま教える、データを受講生の代わりに入力する、など）を行う人がいる。その

両者に共通することは、指導を行う上での意識の問題である。そこで、今一度TA・SA共に教育者としての立場を理解し、指導に臨む必要があるのではないだろうか。また、教員は、SAに指導を任せることで受講生への指導を疎かにしてはならないだろうか。よって、三者が密接に協力しあい、相互理解のもとに指導を行っていくことが大切である。そのためには、初回の打ち合わせ以外の交流の場が必要であろう。

SAの新規志願者数は年々減少傾向にあり、現在のSAの大半がSA経験者である。そして今年度は、時給が削減されたために、志願者数の減少に拍車がかかったことも考えられる。ベテランである4年生のSAが今年度卒業した場合、来年度は本学部のSA経験者の割合が例年に比べ急激に減少する。そのため、SAの人材発掘が急務となる。そこで、教員、SAが協力し、SAに適していると思われる学生に声をかけていくこと、そして、SAという業務がどのようなものなのか、を学生に正しく認識させることが必要になるのではないだろうか（高橋・森田，2008）。

筆者を含めた、今年度で最後である先輩SAの立場としては、残った後輩SAに知識・技術・心得などを継承させる機会が欲しいと考えている。しかし現状では、そういった機会は基本的に講義内に限られているため、不十分である。そこで教員側に対して、知識・技術・心得を継承させるための機会（ディスカッション、勉強会など）の提供を求めたい。また、指導内容がSAごとによって偏ることを防ぐために、受講生への指導方針をより明確にし、細分化することも併せて求めたい。

TAはSAよりも教員に近い立場であり、出席を管理するなど責任のある立場であるため、SAよりも給料が高いのは当然である。ところで、今年度からSAの時給が削減され、1180円から770円になった。更にTAは交通費を貰っている（学外から来ているため当然

ではあるが)がSAは貰っていない。しかし、学外から来たTAよりも、講義内容を知っているSAの方が、仕事量が多かったり、適切な指導ができていたりすることが多々ある。よって、現在のSAの給料はあまりに少なすぎるのではないかと考える。

今年度はSAの存在自体が存続の危機に立たされていて、社会情報学部の教員の方々の尽力により、なんとか給料削減という形に収まったという経緯がある。よって今後は、大学側に対して、情報系科目におけるSAの必要性、特殊性、専門性を積極的にアピールして理解してもらう必要があるのではないだろうか。そして、人材発掘と人材育成は今後のSA制度を担うための鍵になるであろう。

4. 研究会を振り返って

TAとSAのための研究会は、本学部において初めての試みであったが、私が思っていた以上に多数の学生や教員の方々の参加を頂いた。質疑応答において、教員の方に直接意見を言うことができたことや、本学出身ではないTAの方との意見交流ができたことが非常に有意義であった。ただ、研究会を行う前に危惧していたことがある。それは、4人のSA発表者の発表内容が重複することである。同じ発表内容では飽きられてしまうし、発表の価値が薄れるのではないかと考えていたのである。発表者であるSAの一人とは、なるべく重ならないように気をつけたいとの旨を話し合い、発表内容も独自のものにしようと考えてはいたものの、正直不安であった。しかし、当日の発表では、4人の発表内容はほとんど重複することもなく、それぞれ独自の視点からTA・SAを捉え、発表できたのは、狙い通りになったといえよう。

今回の研究会で最後ではなく、来年度以降も、再び学部側がこのような機会を設けてくれることを期待したい。そして、その研究会が、本学部におけるTA・SA制度がより発展

するためのきっかけになることを願ってやまない。

参考文献

- 森田 彦 (2009) 「SAを活用した授業運営——プログラミング演習の場合——」, 札幌学院大学総合研究所『社会情報』Vol.18 No.2.
- 高橋泰明・森田 彦 (2008) 「社会情報学部におけるSA制度の現状と展望——SA志望者数の観点から——」, 札幌学院大学総合研究所『社会情報』Vol.17 No.2.

TAからの報告

社会情報学部におけるTAとSAの役割

——TAとSAの当事者の立場から——

高橋 泰明

(北海道情報大学大学院生)

1. はじめに

札幌学院大学社会情報学部では、学生一人一人がノートパソコンを携帯し、それを活用して実習を行う演習科目が複数開講されている。それらの演習科目の大半では、受講生のサポートを行い、授業運営を円滑に進める為に、TA・SA制度が導入されている。

TAとはTeaching Assistantの略称であり、大学院生からなる実習教育指導員のことである。SAとはStudent Assistantの略称であり、各演習科目の配当年次以上の学部生からなる実習教育補助員のことである。2010年度現在、11科目でSA、9科目でTAを採用している。筆者自身も、表1に示す通り、2004年度～2008年度にSA、2009年度～2010年にTAとして活動している。本論文では、SAとしての経験も踏まえて、TAとしての立場から、TAの果たす役割や、授業における問題点とその対応などについて述べる。

表1 TA・SAとしての担当科目

担当科目	担当年度
情報処理基礎・同演習	SA：2004・2006～2008年度
データ解析基礎Ⅰ	SA：2006～2007年度 TA：2009～2010年度
データ解析基礎Ⅱ	SA：2006～2008年度 TA：2009～2010年度
データ解析Ⅰ	SA：2006～2008年度 TA：2009～2010年度
データ解析Ⅱ	SA：2008年度 TA：2010年度
プログラミング・同演習	SA：2005・2007～2008年度
データ構造とアルゴリズム論・同演習	SA：2005～2008年度
コンピューティング環境管理論	SA：2006～2008年度
コンピュータアーキテクチャ	SA：2008年度
マルチメディア処理理論・同演習	SA：2006～2008年度
情報通信ネットワーク論・同演習	SA：2008年度

2. 担当科目におけるTAの業務内容と役割

2.1 担当科目におけるTAの業務内容

第1節で述べた通り、筆者がTAとして担当した科目は、「データ解析基礎Ⅰ」、「データ解析基礎Ⅱ」、「データ解析Ⅰ」、「データ解析Ⅱ」の4科目である。本節では、これらの担当科目におけるTAの業務内容について述べる。

担当した4科目における業務内容は、主に「担当学生の出欠チェック」、「担当学生の課題チェック」、「学生への対応」である。また、2010年度のデータ解析Ⅰにおける「提出課題の採点業務」も行った。

「担当学生の出欠チェック」は、担当するグループの学生の出欠状況を確認し、それを出欠簿に記入するというものである。具体的には、出席、遅刻、欠席の他、授業時間内における無断退席（早退や中抜け）のチェックを行っている。

「担当学生の課題チェック」は、担当するグループの学生が課題を完了した場合に、それを課題チェック表に記入するというものである。その際、授業当日に提示された課題を完了した場合は○、以前にやり残していた課題を完了した場合は△というように、当日の進捗状況、やり残している課題の有無など、課題に対する取り組み状況を把握できるようにしている。

「学生への対応」は、担当するグループの学生に講義資料を配布、授業の内容や課題に関する学生からの質問、学生のノートパソコンでネットワークの接続不良などのマシントラブルへの対応を行うというものである。ここで、課題に関する学生の質問への対応を行う際には、基本的に「答え」を教えるということはずらず、「ヒント」や「やり方」を教えるにとどめる。

それは、学生に「答え」そのものを教えるだけでは、「なぜこのようになるのか」ということを理解できていないままの状態ですんで進むと、学習効果が上がらず、課題に取り組みさせる意味がないからである。ゆえに、「答え」よりも、そこに行き着くまでのプロセスや概念を理解させることの方が重要である。

「提出課題の採点業務」は、2010年度のデータ解析Ⅰにおいて、毎回提示される課題に対して、学生から提出された解答を、採点・添削するというものである。2010年度のデータ解析Ⅰでは、毎回、授業内容に関する演習課題を提示し、学生は配布された解答用紙に解答を記入している。解答用紙は授業終了時に回収し、それを採点・添削して、次の授業開始時に返却している。

以上が担当科目におけるTAの業務内容であるが、これらの業務内容のほとんどはSAの業務内容（清野・森田，2004）と重複しているものも多くみられる。「担当学生の出欠チェック」は基本的にTAが行う業務内容で

あるが、TA を採用していない科目では、TA の役割を担う者に相当する統括補助員と呼ばれる SA が行っている。

「担当学生の課題チェック」、「学生への対応」は、TA・SA 共に行うが、基本的には TA よりも SA が行うことの方が多い。TA は、担当グループの SA 全員が学生の課題チェックや質問への対応にあたっている際に、対応を求める学生がいた場合への対応や、SA では対応が難しい状況への対応を行うことの方が多い。

2.2 TA が果たす役割

前節で述べた通り、TA と SA では業務内容が重複する部分が多いということが現状であるが、TA には TA の役割というものもある。TA が果たす役割としては、「担当グループの状況管理」、「担当グループの SA の統括」、「教員と学生との架け橋」などが挙げられる。本節では、担当科目における TA が果たす役割について述べる。

「担当グループの状況管理」は、担当グループの出欠状況を把握した上で、遅刻や欠席の多い学生に対して、遅刻や欠席をしないように警告をしたり、課題進捗状況を把握した上で、未チェック課題が溜まってきている学生に対して、課題の達成を促す指導を行ったりし、必要に応じて、状況を適宜教員に報告する役割を担うものである。

「担当グループの SA の統括」は、授業開始時に担当グループの SA への課題チェック表を配布して必要事項の指示を行ったり、授業終了時に SA から課題チェック表を回収して全員のチェック状況を統合する作業を行ったりする役割を担う。全員のチェック状況を統合することによって、次回の授業時に全員で課題進捗状況を共有でき、学生からの進捗状況の問い合わせがあった時も、TA・SA の誰でも対応できるようになる。

また、SA から課題についての疑問点や確

認、学生の出席状況や課題提出状況の確認などの問い合わせがあった場合に対する対応を行い、SA が学生の課題への対応していた時に、SA では対処が難しい状況が発生した場合への対応を行う。

さらに、「教員と学生との架け橋」の立場になる役割も担っている。これは、学生が教員には聞きにくいことを、TA には聞きやすいように努めるという役割であるが、この点は TA だけでなく、SA も同様である。SA も、教員や TA には聞きにくいことを、受講生の先輩学生である SA には聞きやすいように努めるという役割を担っている。また、SA が教員には聞きにくいことを、TA を介して教員に聞けるように努めるという役割も担っている。

以上のことが、TA が果たす役割であるが、その役割を果たすにあたって心掛けなければならないことがある。それは、「予習を怠らない」ことと、「学生への声掛け」を積極的に行うことである。これは TA に限らず、SA にも同様のことが言える。

「予習を怠らない」ということは、TA・SA としては基本的なことであり、かつ当然のことである。予習を怠ると、学生にわからない点を質問されても、それに対処することができず、学生からの信頼を失うことにもなるからである。

「学生への声掛け」は、受講生の中には、自分から話し掛けるのが苦手な学生もいるので、課題が出来ていそうな学生や、逆につまずいていそうな学生に対して、TA・SA の方から声を掛けてやることで、学生が話しかけやすい雰囲気を作る為に必要である。また、マシントラブルが発生している学生がいた場合は、課題を熟すのに支障をきたす場合が多いので、早急に対処する必要がある。

3. 担当科目における受講生の特徴

学生の多様化が進んできており、担当科目

における受講生にも良い点でも悪い点でも特徴が見られる。ここでは、受講生に見られる特徴と、受講生の指導に当たる際の対処方法についても併せて述べる。

学生の出席態度を見ると、近年、遅刻や欠席をする学生が多数おり、特に30分以上遅刻してくる学生が、過去の年度に比べて増加している。さらに、講義の途中に、無断で教室を出入りする「中抜け」や、未チェック課題のチェックを完了せずに、無断で退席する「無断早退」をする学生も存在する。

これは当然のことであるが、授業回数が進むと、きちんと出席している人と、そうでない人では、課題進捗状況に差が出てくる。授業回数が残回数という頃になると、その差は歴然である。また、欠席が多いと、欠席した回の授業内容の理解が困難になってくる。

このように、遅刻や欠席の多い学生の多くは、自分の状況を自覚していないので、出席してきた時に注意し、自分の状況を自覚させる必要がある。また、無断早退をする学生への対応として、当日の課題が全て完了していたとしても、過去に未チェック課題が無いかを課題チェック表で確認し、未チェック課題があれば、退席させずに課題に取り組む様に指導する必要がある。TAやSAが気付かない内に、いつの間にか退席していた場合は、TAは教員に、SAはTA及び教員に報告する。

学生の受講態度を見ると、教員の講義・説明を聞かない学生が多く見られる。ではそのような学生達は教員の講義・説明をしている時に何をしているのだろうか。過去の年度に比べると、居眠りや私語は減少しているものの、1講時の科目は朝が早い為か居眠りが多い。居眠りをしていなくても、インターネット上のmixi, twitterなどのコミュニティサイトやYouTube, ニコニコ動画などの動画サイトを閲覧していたり、他の科目の課題をやっていたりする学生が多く見られる。

このような学生に対して、TA・SAは注意をすることもあるが、注意した直後は上述のような行為をやめるものの、TA・SAがそばから離れると、再び始めてしまい、SAはおろか、TAが注意しても効果がないというのが現状である(清野, 2004)。

また、社会情報学部の演習科目では、学生各自がノートパソコンを活用して、課題に取り組むという授業内容であるにも関わらず、ノートパソコンを忘れる、持ってこない学生も存在する。ノートパソコンがないと当然課題に取り組むことはできず、その回の授業では、「ただいだけ」の状態になり、授業に出席する意味がなくなってしまふ。

これに類似するケースとして、テキストを使用している科目において、テキストを忘れる、持ってこない学生が存在する。このような科目では、テキストに書かれている内容を読んで、その内容を理解した上で、テキストに設けられている課題に取り組むという進め方をしているので、肝心のテキストがなければ課題に取り組むことができず、周りにいる学生に見せてもらわないとならない状況になる。このような状況になると、課題の「答え」を教え合いやすくなってしまい、学習効果が薄れがちになるという問題も発生する。

学生の課題への取り組み状況を見ると、テキストや配布資料を読まない学生が多いという傾向にある。これは担当した4科目に限らず、過去にSAとして担当した他の科目でも同様であり、演習科目全般に見られる傾向である。ここでは、TAとして担当した4科目についての特徴を述べる。

「データ解析基礎I」、「データ解析基礎II」の課題は、テキストに記載されている例題や演習問題を実際にやってみるという内容であるが、基本的に一部の演習問題を除いて、テキストに解法が記載されており、その解法をしっかりと読んでいれば問題なくできる内容となっている。解法が載っていない演習問題に

ついても、すぐ前の例題や説明の部分を読めば、大体できる内容である。

「データ解析 I」,「データ解析 II」の課題も、基本的に毎回配布される資料を一通り読めば、できる内容である。配布資料には、課題に関わる例題が記載されており、使用する従属変数や独立変数が演習課題と異なる以外は、操作方法、考察の記述方法は、ほぼ同様である。

これらのように、課題そのものはテキストや配布資料を読めばできるようになっているものの、テキストや配布資料を読まない学生が多いというのが現状であるので、そのような学生には、まず課題に関連する部分を読むように指導する必要がある。それでも読まない、あるいは、内容が理解できない学生に対しては、TA・SA が一緒に読み、簡単に説明してやると、比較的読むようになり、理解も容易になるようである。

このように、単に課題に取り組むのではなく、まずテキストや配布資料を一通り読み、課題に関連する内容や、やり方を理解させた上で、課題に取り組ませることで学習効果の向上が見込まれるが、そのような姿勢を持たせる為には、どのような対応を取ればよいのかが今後の課題とも言える。ただし、このテキストや配布資料を読まないという問題は、最近見られた傾向ではなく、過去の年度から長年に渡って見られる傾向であり、簡単に解決できる問題ではないと考える。

データ解析系の4科目に共通して見られる傾向として、割合の計算ができない学生、自分で考えない学生が多いという点が挙げられる。特に、自分で考えない学生というのは、TA・SA への依存度が高く、自分で考えて課題の内容を理解することよりも、TA・SA に聞いて、とりあえず答えが知りたいという傾向の学生である。

また、出席状況と課題進捗状況が比例傾向にある。毎回出席している学生や欠席が少な

い学生は、全部又はほとんどの課題がチェック済みであるのに対して、遅刻や欠席が多い学生は未チェック課題が多い。ただし、前述の依存度の高い学生についてはこの限りではない。依存度の高い学生の中には、毎回出席していても課題が消化できずに溜まっていく学生も見られる(高橋・森田, 2007)。

表2 データ解析系科目の受講体系

科目名	配当年次・開講時期	受講条件
データ解析基礎 I	1 年次・後期(必修)	1 年生全員, 2 年生以上の単位未修得者
データ解析基礎 II	2 年次・前期	データ解析基礎 I の単位取得者
データ解析 I	2 年次・後期	2 年生以上
データ解析 II	3 年次・前期	データ解析 I の単位取得者

以上で述べた通り、多様な学生がいるわけであるので、そのような学生に教える際には苦勞する点や困難な点もある。データ解析系の科目は、表2に示すような受講体系となっており、基本的に内容が積み上げ方式になっている。

その為、当該科目の受講には、それ以前の科目の内容を理解していることが前提となるのであるが、現受講科目以前の科目でやった内容をほとんど覚えていない学生が多く、TA・SA が説明やヒントを学生に示しても、なかなか理解に至らないケースがあるというのが現状である。特に、「データ解析 I」においてはその傾向が顕著に見られる。

表2を見てもわかる通り、2010年度現在、「データ解析基礎 II」と「データ解析 II」は、それぞれ前提科目の単位取得が受講条件になっているが、「データ解析 I」は前提科目の単位取得が受講条件になっておらず、配当年次以上の学生であれば誰でも受講できるようになっている。

本来、「データ解析Ⅰ」の授業内容は、「データ解析基礎Ⅱ」までの授業内容を理解していることを前提としているので、「データ解析Ⅰ」の受講には、「データ解析基礎Ⅱ」の単位取得を受講条件とするべきであると考える。

4. 担当科目の授業内容に対する提案

本章では、今後の社会情報学部の演習科目の授業運営をより円滑にすることや、多様な学生に対応することを目的とした授業改善の為に、TAとして担当したデータ解析系科目について、いくつかの提案を行う。

データ解析系科目では、資料(PDFやWORD)をスクリーンに表示して講義を行っているが、重要な内容、操作方法、関連ページなどの要点をPowerPointにまとめて講義を行うと良いのではないかと考える。第3節で述べた通り、講義を聞かない学生、配布資料やテキストを読まない学生が多いという現状であるので、要点をまとめたもので講義を行うことによって、このような学生が多少なりとも減少するのではないかと考える。

「データ解析Ⅰ」、「データ解析Ⅱ」においては、演習時間の確保が必要であると考えられる。現行は1コマ(1.5時間)で授業を行っているが、講義時間が多い回は、演習時間がほとんどない時もある。例えば、講義が約1時間、演習が30分弱という回だと、全課題が時間内に終わらない場合が多い。

その為、現行の1コマ(1.5時間)よりも、2005年度以前のように2コマ連続(3時間)の方が授業を円滑に進めやすく、受講生にとっては課題を熟す時間が増える為、じっくりと課題に取り組むことができ、学習効果が上がりやすいと考える。また、指導を行うTA・SAにとっても、2コマ連続の方が指導しやすい。

しかしながら、授業のコマ数の変更は容易に行うことができないので、現行の1コマで今後も授業を行うのであれば、1コマ全てを

演習に使えるわけではないので、課題が授業時間内で終わるように、最低限必要な課題に絞り、分量を適切に設定する必要がある。ただし、教員が設定する課題は、授業の内容に深く関わるものであり、学生はその課題に取り組むことによって、データ分析を実際に経験することになるので、課題をむやみに削除することは好ましくないと考える。

「データ解析基礎Ⅰ」においては、必修科目であり、学年が上がった時のことも考えると、基本的なことが身についたかどうかを判断する為に、最終回前後または定期試験期間において、簡単な試験の実施を検討してはどうかと考える。

また、この「データ解析基礎Ⅰ」に限らず、データ解析系科目全般にいえることであるが、内容を理解をしているのかを判断する為に、必要に応じて試験ないしはレポートの実施を検討してはどうかと考える。

5. むすび — TA・SAとしての経験が役立つこと —

学生に対しての指導を通して、指導力を身に付けることが出来ることはもちろんのこと、今まで知らなかったことを知ることが出来る。例えば、予期しないトラブルへの対応方法や、課題に対する別の解法の発見することなどが挙げられる。

また、TA・SAとして指導をするにあたって、予習を行うわけであるが、その予習と授業での指導を通して、受講生として授業を受けていた時には、理解できていなかった内容や理解しにくかった内容がしっかりと理解できるようになる。

さらに、受講生の時は「学習者」としての視点で授業を見ていたのに対して、TA・SAの時は「指導者」としての視点で授業を見ることになるので、「学習者」、「指導者」という異なる両方の立場から、物事を見る力を養え、その視野が広がる。

以上で述べたように、TA・SA としての経験を通して、得られるものが多くあるので、社会情報学部においては、今後も TA・SA 制度の活用が継続されることが、TA、そして SA 経験者として望ましいと考える。

謝 辞

発表及び執筆の機会を頂いた札幌学院大学社会情報学部の高田洋先生に御礼申し上げます。

参考文献

清野 瞳 (2004) 「SA を活用した実習教育の現状と課題」『札幌学院大学社会情報学部 2003 年度卒業論文』, <http://su10.sgu.ac.jp/~morita/Seminar/8thStudent/sotuken/seino/>

清野 瞳・森田 彦 (2004) 「学生教育補助員 (SA) マニュアル」札幌学院大学社会情報学部

高橋泰明・森田 彦 (2007) 「社会情報学部における SA 制度の現状と展望」『社会情報』 Vol.17 No.2

社会情報学部の学生と教員の狭間で思うこと

柚洞 一央

(北海道大学大学院文学研究科・
南幌町教育委員会社会教育審議委員)

1. 社会情報学部の学生の現状について

これまで TA としてかかわった講義・演習の中で私が感じた学生の問題点についてまず指摘したい。

- ・講義そのものに興味がない…単位が欲しいだけで、講義に参加する学生が過半数である印象がある。単位を取得することが自分にとってどういう意味があるのかまで考えている学生は稀である。
- ・そもそも社会に興味がない…視野が狭い傾向がある。世の中にはさまざまな人が暮らしていて、考え方もさまざまであることが

十分に認識できていない。

- ・答えが合っていればいいと思っている…つまり、考えることを拒否している (考えることがどういうことかがわからない) 傾向が見られる。TA に対して、答えだけ教えて欲しいという要望もある。
- ・一方で意欲的な学生もいる…学習意欲がある学生も少数ながらいる。学生の二極化が進んでいる。

2. 社会情報学部の教員の現状について

教員の講義の進め方、学生への対応に対して、私なりに思うことを指摘する。

- ・講義の動機付けがうまくいっていない…なぜこの内容を理解する必要があるのかを最初に学生に伝える必要がある。社会の実態を認識できていない学生にとって、学習内容が自分の日常生活にどのように役に立つのかを感覚的に示すことは、講義への意欲を向上させることにつながるのではないか。
- ・学生の学力実態に合った講義内容になっていない…これは難しい問題でもある。大学としての最低限の学習内容を理解させたいという思いと、学生の現実とのギャップをどう埋めるのかという問題である。
- ・管理志向が強い…厳格な出席確認にだけ重きを置くと、学生は講義時間内だけ座っていればいいという感覚にしかならない。講義内容を理解させるためには、教員から学生への一方的な講義だけでは学生の学習への意欲は向上しない。

3. 私が考える TA の役割と必要な教育実践

これらの学生、教員、相互の実態の中で TA が担える役割とはなにか。私は、教員が提示する概念的・技術論的な世界を、札幌学院大学社会情報学部の学生の日常認識レベルで理解できるように「通訳」することだと考えている。しかし、その作業には限界がある。そ

れは、社会に対してあまりにも興味関心がない学生の場合、何を言っても通じない場合があるためである。そこで、重要になると思われる教育実践は、社会の実態を主体的に体験させることである。この点に関して、学習意欲がない、社会に対して興味がもてない学生はなぜ生じているのか、その背景を指摘しながら、社会教育の視点も交えて提言した。

まず、学習意欲に乏しい学生が生じている背景に関して、3点問題点を指摘した。まずは、社会に対する自発的な興味関心を追及する場が失われていることである。小・中・高の学校教育の中で、学校組織に「飼いならされた」学生が増えているのではないだろうか。2点目は、親の自己満足的な子育てが挙げられる。子どもの意思を尊重する前に、自分の理想を押し付けているような事例が多々見受けられる。子ども本人が大学で学びたいのではなく、子どもを大学に行かせたという親の自己満足が強い実態があるのではないか。3点目は、地域の教育力の低下である。子ども

たちの地域社会における居場所が少なくなっていると同時に、多様な大人と接する機会そのものが減少している。このことが社会に対する認識が十分に形成できていない大きな理由の一つではないだろうか。このような社会環境の中で成長し、社会情報学部に入學してきた学生にどんな教育をすべきかを考える必要がある。

本研究会で提言したのは、地域の教育力を利用した教育実践である。地域の人たちとのかかわりの中で、学ぶ、悩む、失敗する。そういった実体験をさせることが、すべての大学教育の根幹に必要なのではないだろうか。そういった社会体験を大学の講義で敢えて実施する必要があるのかという疑問もあるが、学生の実態を思うと、せざるを得ないように思われる。社会生活を営む自信をつけさせる、学ぶ喜び知る喜びを体験させること、まずはそこから始めなければならぬのではないだろうか。